

小説「東京メトロ」

藤田 稔

東京の地下鉄ほど美しく、清潔で、時間に正確で安全便利な乗り物は世界でも類がない。毎日、何百万人もの人が地下鉄の恩恵にあずかっている。従来の営団地下鉄は東京地下鉄と名前が改められ、愛称は「東京メトロ」となった。「メトロ」という言葉には私は特に強い思い出がある。

私が旧制松山高等学校の生徒のころ（昭和22年、1947年）待ちに待ったフランス映画「望郷」が松山セントラル劇場で上映されることになり、早速観に行った。この映画は監督がジュリアン・デュビビエ、主演男優がジャン・ギャバン、女優がミレユ・バランで、1937年に製作された。

ジャン・ギャバン扮するギャング、ペペ・ル・モコはパリ警察に追われる身で、アルジェリアの首都アルジェのカスバに潜伏している。そこへフランス人女性ミレユ・バラン（ギャビー）が観光に訪れるが、二人はフランスの同郷出身であることがわかり、密会を重ねる。その会話の中でジャン・ギャバンがパリの地下鉄を回想して「メトロ」といい、二人は憧憬の目で見つめ合うのであった。そのワンシーンがいまだに私の脳裏に焼き付いて離れない。

「メトロ」は英語、フランス語とも同じ英字の「metro」で地下鉄の意味である。疎外されつつも失意の美学に生きる人間のロマンチズムがファシズムの足音が近づく当時のヨーロッパの人々に熱狂的に受け入れられ、この映画は大ヒットした。

人生につまずいた逃亡者ペペ・ル・モコの自由への憧れ、パリ・メトロへの郷愁、そこに宿命の女が近づき、はかない恋のように通り過ぎてゆく。

恋が果たされぬと知ったペペ・ル・モコは警察に連行されて波止場に赴く。豪華客船のデッキにいるミレユ・バランを見つけたペペ・ル・モコは「ギャビー」と絶叫するが、船の出発を告げる「ボー」という大音響にかき消される。もはやこれまでと、ペペ・ル・モコはその場で自殺した。私は涙が止まらなかった。

私は昭和石油の中央研究所在職中（1975年）アルジェリアのオラン市に潤滑油研究所建設の技術協力のために、寺田さん、貴志さん、私に出張を命ぜられて行った。

ある日曜日に、本社より出張してきていた本田さんの車で、オラン市より500 km離れた首都アルジェに行った。道中、アルジェリアの人々と交流したが皆さん親切で友好的であった。アルジェ市には本社より出張してきた五味さんたちがいて、豪華な夕食をご馳走してくれた。また遺跡見学にも案内して下さった。

アルジェ市は地中海に面しており、まさに映画「望郷」と同じく、海は青く輝き、白いホテルは目にまぶしかった。私はカスバの迷路に足を踏み入れた。ペペ・ル・モコとなってカスバを彷徨した。いつしか「メトロ」と一人でつぶやいていた。

東京メトロ — 今日も私はメトロに乗って揺られている。
甘い響きにひたりながら。

2026年3月20日

石油分析化学研究所 研究所長
工学博士（大阪大学）技術士（化学） 藤田 稔

